



かつて、米沢市田沢地区で行われていたという木流し。そこで活躍していた“木流し衆”と呼ばれていた人々は、山で木を伐採し、運ばれた木材は薪（たきぎ）として使われ、木流しは田沢地区の一大産業だったそうです。

しかし、時代とともに生活様式や交通形態が変化し、河川を利用した運搬も陸路へと移り、昭和初期に木流しはその役目を終えました。今では木流しを知る人も少なくなり、市民の生活を支えた仕事が忘れ去られつつあります。

そこで、田沢地区で木流しをしていた星野貞一（ていいち）さん（90・米沢市）と伊藤保作（ほさく）さん（89・米沢市）のお二人に、若かりしころ体験した木流しの思い出を語っていただきました。

星野さん 木流しってのは、川を使って「ばいだ」を町まで流すごどを言うんだ。田沢地区だけでなく、築沢（やなぎわ）地区や綱木（つなぎ）地区などでもやってんだ。

車が普及すると、田沢では八谷（やたに）までばいだ流して、そこからトラックで運ぶようになってよ。昭和30年ごろまで続いたっけがなあ。田沢が一番最後まで木流しやってんだ。

木流しには、山から小さな沢まで流す春木流しってのど、米沢市内の木場町（きばまち）まで流す秋木流しってのがあんだ。

春山に入って木切んなんねんだけど、雪がやっこいとぬがっからよ、雪がしまって硬くなる2月ごろに山に入んだ。ブナやナラの木切り出して、そりに乗せて運ぶのよ。

雪解け水で水流が多い時期に、田沢地区の山の中にある小さな沢から麓のみんつあばら（水沢原）まで流してやって、ばいだを川沿い近くの留（と）め場に集めておくんだ。9月の米の収穫時期近くになっど、その留め場から町中の木場町までばいだ流す秋



マドノコを手に昔を懐かしむ星野さん

の木流しが始まった。

伊藤さん 木流しは農業の閑散期にやってだんだげんど、秋の木流しは稲刈り作業ど重なんのよ。ほだがら、女性が稲刈りしてっどごが多がったんだ。そんでも、はせ掛けは女性じゃあぶねくてできねがら男がするもんだ。今でも時々はせ掛けしてっどご見つかもしんにえげんども、昔のはせ掛けは、はしごさ登ってしんなんねえぐらい高がったんだ。



木流しの思い出を語る伊藤さん

星野さん 俺が木流しを始めたのは14、5歳ごろだったがあ。家の近くに河原があつたがら、子どものどぎがら木流しにあこがれでだんだ。ほだがら、お頭に頼み込んで、学校を休んで木流しに参加したごどもあつた。

体格がいがったからがどうがはわがねげんど、最初から川さ入って、胸まで水に浸かって、どんどん木を流していったもんだ。

川の中は浅いどころもあれば深いどころもあんべ。川底の石もつるつるだがら、滑んのよ。たかじょうだど滑つがら、そのうえにわらじをはいて滑んねぐなるようにしたんだ。

俺は川こぎにやあがってんしねがら、木流しの先輩が後についで来いって言われで、おにへいたけでだもんだ。そして俺がかぶだれくうど、周りの連中は喜んで見んのよ。そんな日は早く家さ帰って、風邪なんかふつとばしたもんだ。

川さ入って作業すつから、けがする人もいだったんだ。俺はおっきなけがしながつたけんど、足がら血流してる人もいだったなあ。げんど、本人はぜんぜん気づいていなくてよ。何でだがわがつか。川さ入ってから、ちみだくて、痛いのに気づがねんだ。

伊藤さん 昔は、15歳になつど男は一人前だつて言われだもんだがら、俺も15歳になつど親父に引つ張られで木流し始めだんだ。

まずは、おかもちつていう弁当運びから始まつたっけ。お頭と年寄りに案内されだどごまで弁当たがって行って、火焚いで木流しの作業終わんの待つてんのよ。わつぱ弁当6～7人分のほかに、蓑やみなわしよつて往復して、大変だつたっけなあ。弁当くずんにえように縄で縛つて、7人分しよつていげるようになったら一人前だつて周りから言われだもんだ。

弁当のふたを茶碗代わりにして汁ついでもらつて、「まだ食うのがあ」つて言われるぐらい、みんな食べるのよ。弁当さ名前書いでるわけじゃねえがら、間違つてほかの人の弁当食べでだ人もいだつけな。

そういえば、ばんだい餅つて知つてだがあ。残つたご飯を切り株の上で、根曲がりした枝使つて、

餅みだくつぶして、焼いだり味噌汁なんかにいれだりして食ったもんだ。昔は山仕事で食ってだけんど、今だとうまぐなくて食べらんにごでなあ。

伊藤さん 木揚げの作業には、20人ぐらいいいたがなあ。そのうち、5、6人はやろっこだ。ばいだがうまく川を流れていくよう、1週間ほどかけて、下流から上流に向かって川を見で歩いていぐんだ。

木場川で木揚げすどき、川上から番傘使ってばいだ流す合図を送るんだけど、伝言ゲームのように番傘で合図を送っていぐがら、途中で合図を間違うどきもあんのよ。

あるどき、「止め」の合図が出でんのに、間違っで「抜け」の合図が伝わってぐがら、ばいだが次々流れできて、木揚げの作業がいづまでも続ぐのよ。川がらあがって体あつためる暇もないんだ。そういうどきは、「合図が間違っているってゆってこい」って、やろっこは走らされだもんだ。あんどきは大変だったなあ。



木流しを再現した模型
＝田沢コミュニティセンター資料から

2人 禪一丁にちゃんちゃんこ着た男たちが木場川に入って木を引き揚げでつと、周りの道路は黒山の人ばかり。女性の見物客、とくに女学生が多がったんじゃないか。まるでまつりのようなにぎわいだった。夜になつと、木流ししている連中は居酒屋に集まって、毎晩酒飲んでだんだ。寒い中での大変な作業だがら息抜きも必要だったんだべなあ。

星野さん 俺が木流ししてつどきの楽しみは映画見さ行くごどだった。あのころ、米沢には映画館が3館ぐらいあつたべ。わらわら木流しおやしてよ、「愛染かつら」見に行つたもんだなあ。



ばいだに彫られていた家ごとの版
＝田沢コミュニティセンター資料から

伊藤さん ばいだの長さに工夫があるの知つてつか。ほかの地区のばいだと見分けがつぐように、地域ごとにばいだの長さが違うんだ。田沢では2尺5寸つで決まってだんだ。ばいだには家ごとの版が斧で彫つてあつたら、誰のばいだがすぐわがんなだ。

伊藤さん やろっこにはノコギリを研ぐ仕事もあつたつなあ。昼休みに研いだりしたもんだげんど、木がよく切れるようにでぎねど、「こんな灰ならしみだいなノコギリで木は切れねごで」と

怒られたもんだ。経験を積んでいけど、徐々に上手くなっけんどもな。

山仕事の交流で、マドノコを見せてもらったときは、ナラやブナの木など大木を切るのにちょうどよく、節でもなんでも同じように切るごどができた。当時は何千円もして高くて、あこがれのノコギリだったごで。

星野さん 田沢地区に住んでだ男のたいがいは木流しやっただもんだ。山に入って木を切ったり、川に入ればいだを引き揚げたり、今じゃできねような大変な作業も多かったげんど、木流しは田沢地区を支えたおっきな仕事。振り返ってみっと懐かしいなあ。

方言・用語解説（文中の使用順）

- ばいだ …… 燃料となる薪
- きなんね …… 切らなければならない
- やっこい …… 柔らかい
- ぬがる …… 雪などに足が取られたり、埋まること
- みんつあばら …… 水沢原。米沢市田沢地区の地名
- 留め場 …… 木流しで、木を一時集めておく場所
- はせ掛け …… 収穫した稲を天日干しする作業
- しなんね …… しなければならない
- いがった …… 良かった
- たかじょう …… 地下足袋。漢字で「高丈」と書く場合もある
- がってんしね …… くじけない
- たがって …… 持って
- わっぱ弁当 …… 円筒状の木製の弁当箱
- 蓑 …… わらなどを編んで作った雨具、荷物を背負うときの背中あて
- みなわ …… オオカワやモワダの木の皮などで作ったロープ
- くずんにえ …… くずれない
- 川こぎ …… 川を渡る
- おにへいたけで …… 得意げにしてみせる様子
- かぶだれくう …… ずぶ濡れになる
- ちみだい …… 冷たい
- やろっこ …… 子ども、半人前
- わらわら …… 急いで
- おやして …… 終わらせて
- 2尺5寸 …… 1尺は約30cm、1寸は約3cm



- 掲載日 平成 23 年 1 月
- 執筆者 大竹茂美（置賜文化フォーラム事務局）
- 取材協力 星野貞一さん（木流し経験者 米沢市）
伊藤保作さん（木流し経験者 米沢市）
田沢コミュニティセンター
（タイトル写真は田沢コミュニティセンター資料から）